日本言語学会第 141 回大会
発表要旨

口頭発表（2010 年 11 月 27 日）

【A 会場】司会：高野祐二、阿部潤

The nominative/genitive alternation in modern Inner Mongolian: A visual analogue scale (VAS) evaluation method-based analysis

Hideki Maki, Lina Bao
Badma Odsar, Satoru Yokoyama

This study examines the distribution of genitive subject in Modern Mongolian spoken in Inner Mongolia (Mongolian) by using the Visual Analogue Scaling (VAS) evaluation method. Maki et al (2009) claim that genitive subject can be licensed by N/D via long-distance agree across a CP boundary based on the data collected by intuitive judgments from a small number of informants. In this study, we collected a large number of data from native speakers of the language, and statistically analyzed it based on the VAS evaluation method. The analysis suggests that Maki et al's (2009) claim is correct in its essential point in the sense that a 'deep genitive subject' is as natural as a 'deep nominative subject' in Mongolian.

The Origin of the *Ga*/*No* Conversion in the History of the Japanese Language

Asako UCHIBORI, Hideki MAKI, Yin-Ji JIN

In this paper, we will present a hypothesis regarding the origin of the g*a*/*no* conversion in Japanese, focusing on a question as to why and how these two case markers have become exchangeable, but not the others. Old Japanese (the 10th to the 11th century) had two types of genitive subject markers *ga* and *no*, which appeared depending on the person feature of the subject. Around the 16th century, an influential language change took place in Japanese, which caused a situation where *ga* and *no* could be freely alternated within prenominal sentential modifiers, no matter what person feature the subject had. We claim that this loss of person feature agreement is the origin of the case marker alternation in Japanese.

Complement deletion in modern Ulster Irish

Dónall P. Ó Baoill, Hideki Maki

This paper examines the distribution of the reflexive anaphor *sé féin* 'he self' in modern Ulster Irish (Irish), and considers classification of anaphors in the world's languages. Katada (1991) proposes a three-way classification of anaphors based on raising of the anaphor and the distance of raising: (1) long-distance raising, (2) local raising, and (3) non-raising (local relation). She also shows a correlation between (1-2) and subject orientation, and no correlation between (3) and subject orientation. This classification, however, misses one combination, that is, the combination of non-subject orientation and the long-distance relation. In this paper, we will show that the reflexive anaphor in Irish *sé féin* 'he self' belongs to the fourth category, and propose a new universal reflexive system.

The Syntactic Structure of Dvandva V-V Compounds in Chinese

Fumikazu Niinuma, Zhang Chao

Li (1990) argues that the patterns of theta identification differentiate resultative V-V compounds from Dvandva V-V compounds (AND-compounds in Li's term) in Chinese. In this paper, we provide three pieces of evidence indicating that there is a syntactic difference between Result Compounds and Dvandva Compounds. More specifically, we show that a Dvandva V-V compound in Chinese behaves as if a single verb. We propose that a verbalizer v^0 (cf. Marantz (1997), Arad (2003)) is concatenated to the element where the verbal root 2 is adjoined to the verbal root 1. Finally, we consider the difference between Dvandva V-V compounds in Chinese and those in Japanese.

英語における Wh 主語構文：コピー理論に基づく空移動仮説再考とその帰結

三上傑

英語における主語の疑問化に関しては、平叙文と同じ語順であるという性質上、表層の語順が変化しない限り移動は適用されないとする空移動仮説 (VMH)が提案され、Wh 主語は顕在的 Wh 移動を起こさないと分析されてきた。それに対して、Agbayani (2006)は、Wh 主語が移動の存在を示唆する現象と移動しないことを示唆する現象の両方を示すとし、その二面性を捉えるために、素性移動理論に基づく VMH の修正を試みている。

本発表では、Agbayani による VMH の修正が理論的・経験的に妥当でないということを指摘した上で、コピー理論の枠組みの下、Wh 主語は narrow syntax の段階で CP 指定部に Wh 移動を起こすものの、経済性の観点 (cf. Abe and Hornstein (2010))から、TP 指定部を占めている下位コピーが PF の段階で具現されると主張し、コピー理論に基づく VMH の修正こそが、Wh 主語の有する二面性を捉えられるということを示す。

不活性条件と主要部移動の Excorporation 分析

江頭浩樹、外池滋生

Chomsky (2007)は、A 移動と wh 移動とが並行的に進行するという派生のメカニズムを採用し、主語条件を不活性条件から導くことを提案している。しかし、この提案には(1)格素性の継承という特殊な操作の導入，(2)主要部移動と A 移動の拡張条件違反、(3)前置詞残留の不活性条件違反、などの問題がある。本発表では、複数の語彙項目が複合体として辞書から取り出されることがあり、含まれる個々の語彙項目の特性に従って順次分離(Excorporate)されて、本体構造と併合されるという主要部移動のメカニズムを提案する。英語では v*と V そして、C と T は v*-V, C-T のように複合語彙項目を形成するが、最終的には[CP …C… [TP…T …[v*P …v* [VP…V…]]]]という標準的な節構造が形成される。これにより、A'移動は不活性条件に違反することなく A 移動された要素に適応することができ、継承は不要になり、主要部移動も A 移動も拡張条件に違反せず、また前置詞残留も可能になる。

【B 会場】司会：遠藤喜雄、菊池朗

主要部内在型関係節とフォーカス要素について：格助詞決定詞分析の観点から

高橋洋平

遠藤(2010)は主要部内在型関係節の内部に「だけ」「さえ」といったフォーカス要素が生じるとその文法性が低下すると観察しているが、フォーカス要素がスコープを取ることに着目して関係

節の内部に他のスコープ要素を同様に仮定してみると、問題の効果はスコープ要素全般に期待されることが明らかになる。

(1)　* ケーキだけ/さえ皿の上に置いたのを取って食べた。(遠藤 2010: P.4 容認度標識は筆者)

(2)　*/?? ほとんどの学生が太郎がどの宿題も試験前に出したのを提出した。

(Shimoyama 1999: P.153 容認度標識は筆者)

(3)　* 教室に誰かがいたのが黒板をきれいにした。

本発表では、Tonoike の格助詞決定詞分析と無移動演算子変項分析からこの現象を考察し、問題の非文法性は関係節と主節との間に存在する変項の役割を想定された格助詞が関係節中のスコープ要素により束縛されていないという事実に起因すると結論付ける。

取り立て詞とフォーカス

林下淳一

日本語の取り立て詞は、名詞句に後続する場合、(1)のように格助詞の前後に現れうる。

(1)　ジョンが{木村先生だけに・木村先生にだけ}挨拶した(らしい)。

(1)はともにジョンが木村先生一人に挨拶したという状況では真となり、木村先生以外の人に挨拶したという状況では偽となるため、この二つの語順には意味的な違いはないように思えるかもしれない。しかし本発表では、Rooth (1985, 1992) の Focus Alternatives という概念に注目し、両語順は意味論上、区別するべきであると主張する。『だけ-格助詞』の『だけ』は Focus Alternatives を参照するのに対して、『格助詞-だけ』の『だけ』は談話上のすべての個体を参照するのである。また、『だけ-格助詞』の『だけ』の量化の領域は Roberts (1996)の Question Under Discussion (= QUD)であり、『だけ-格助詞』の『だけ』が Focus Alternatives を参照するという直感は、Focus Alternatives と QUD が体系的に関連付けられているからである(cf. Rooth 1992)と論じる。

日本語の左方転移構文と無助詞名詞句：情報構造理論的考察

山泉実

（註 「左方転移構文」（以下 LD）と言っても、文頭への移動などの派生は想定しない。）日本語の LD を検討し、3 つの主張をする。(I)情報構造理論について：日本語では変項を含んだ命題を表す間接疑問節を左方転移でき（例 誰が一朗を殺したのか、犯人が分からない。）、しかも左方転移要素は文の題目をアナウンスすると言われているので、変項を含んだ命題も題目や discourse referent になれると言える。 (II)LD の通言語的な機能について：従来、左方転移句は題目をアナウンスすると言われてきた。しかし、日本語では焦点をアナウンスすることもできる。（例 （誰が一朗を殺した犯人でしたか？）―山田次朗、彼[=焦点]が犯人でした。）(III)左方転移句と日本語の無助詞名詞句（の一部）は、指摘されてきた機能が酷似している。無助詞名詞句の一部は、左方転移名詞句で、主節内にそれを受ける代名詞がないものなのであろう。

内在格とその具現条件―there-構文を中心に―

一田小友希

現行のミニマリスト理論では、”value”を受けた構造格は Spell-Out 操作によって適切にその格が morphophonological に具現されるとされているが、 内在格の具現に関しての研究はほぼ皆無である。本研究の目的は、英語 there-構文において be-動詞は there-構文の意味上の主語の顕在的 wh-

句移動を許すが be-動詞以外の非能格動詞は許さないという不均衡を分析することによって、構造格とは別の内在格独自の格の具現の統語メカニズムを明らかにすることである。

Ura (1994)は、there-構文における wh-句移動の可否に関する不均衡の差異を顕在的 V-移動の有無に起因するとしているが、それでは助動詞の関与の為顕在的 V-移動の無い例文に見られる差異が説明できない。本発表では、その点を指摘した上で Kayne (1987)のアイデアを発展させた内在格具現条件を提案する。

複合動詞の自他交替と他動性調和に関する統語論的一考察
―「V 上がる」と「V 上げる」を中心に―

小川芳樹、新沼史和

日本語の語彙的複合動詞の V1 と V2 の結合に関しては、影山(1993)の「他動性調和の原則」をはじめ、いくつかの語彙意味論的制約が提案されているが、いずれにも経験的な問題がある。

本発表では、V2 の反他動性、V2 の意味漂白、V1 へのサ変動詞の代入、V1 の自他交替の観点から、影山が一律に語彙的複合動詞とする「V＋上がる／上げる」を、Type A（押し上げる）、Type B（舞い上げる）、Type C（炊き上がる）に分け、いずれも統語部門で形成されると主張する。具体的には、従来の語彙動詞を語根と動詞化接辞 (verbalizer）に分けた上で (Marantz 1997)、次のように論じる。Type A は語根同士が直接併合され、V1 と V2 が外項を認可する機能範疇 Voice から等距離となるため、Multiple Agree により他動性調和が要求される。一方、Type B,C は、V2 がそれぞれ、語根と vP の間の助動詞的機能範疇（武部 1953、阪倉 1966)、vP と VoiceP の間のアスペクト的機能範疇（Cinque 2006)に文法化しているため、Voice により近い V2 のみが文の他動性を決定する。

日・英語における比較節の派生と左枝分かれ構造からの抜き出しについて

稲田俊一郎

本発表は、日・英語の比較節における比較削除（程度変項を含む DP の削除）の適用の義務性に係わる言語間変異について、名詞修飾構造に焦点をあてて考察する。英語では、比較削除は左枝分かれ構造条件（LBC）に違反する A'-移動の救済のために義務的に適用される（Kennedy & Merchant (2000), Merchant (2001)）。これは日本語の段階的形容詞が表す性質の程度に関する比較節でも同様である。しかし、数量の比較節での A'-移動は、日本語では比較削除の適用が随意的である。本発表は、そもそも後者の場合の移動には LBC が課されないと主張する。また、日本語比較構文の関係節分析(Beck et al. (2004), Kennedy (2007))に基づけば、比較削除の随意性を説明するには「数」・「量」を表す形式名詞（そしてその類のみ）の関係節化を仮定せねばならないことを論証する。

【C 会場】司会：加藤重広、佐々木冠

いわゆるタ形語尾の形態論的範疇について

大島デイヴィッド義和

形態素 /te/、/ta/、/tara/、/tari/、/taroH/、および /taQte/ (以下 T 形態素と呼ぶ) を伴う述語形式 (いわゆるテ形、タ形など) に関しては、その文法論的取り扱いをめぐって二つの対立する立場がとられてきた。伝統文法においては、T 形態素は述語連用形に後接する助詞または助動詞とされる。

対して、Bloch (1946)、寺村 (1982) など構造主義言語学および生成文法論の立場に立つ研究者の間では、T 形態素を動詞語幹に直接続く屈折接辞とする分析が広く受けいれられてきた。本稿は、(伝統文法の立場に近い) T 形態素は連用形に後接する助詞であるという分析を提示し、これがBloch、寺村らの分析に比べてより妥当なものであることを、(i) T 形態素の一部は屈折接辞としては一般的でない意味機能を持つこと、(ii) 多くの述語類に関して、テ形・タ形などは連用形を構成要素として含むと分節するのが自然であること、および (iii) T 形態素が独立したアクセント句を構成しうること、の三つを根拠として論じる。

「動詞＋テイル」は本当に〈結果状態〉を表すか？「テイル一義説」の提案

都筑鉄平

日本語の-teiru が動作動詞について動作継続を表す場合と変化動詞について結果状態を表す場合があるという説は一般的に受け入れられているが，動作とも変化の結果の状態とも言えない-teiruが存在するなど，この二分類は様々な問題を含んでいる。本発表では，従来の研究で見られる(1)動詞の分類における語彙的意味と-ru 形の意味の混同や(2)-teiru の意味分析における「意味」と「指示/解釈」の混同を指摘してこの区別を明確にすることで，従来の「変化動詞」が実は変化の意味を持たないことや-teiru が結果状態の意味を持たないことを示し，結果状態の解釈が前者のもつ「逸脱」性と後者のもつ「デアル」性の複合が促す解釈のひとつでしかないことを明らかにする。この議論に基づき-teiru の二分類説を放棄し一義説をとるべきことを示すことで，-teiru にまつわる問題を解消するとともに，今後の研究への展望を示す。

「のだ」文の構造と機能

五十嵐啓太

「のだ」文には「命題＋のだ」と「名詞＋なのだ」の区別がなされているものの、これまで両者の機能上の区別は曖昧なまま、もしくは同一のものとして扱われてきた。しかしながら、同じ文脈において「命題＋のだ」が用いられる場合でも「名詞＋なのだ」を用いることができない、両者が機能上異なることを示す例が存在する。そこで、本発表ではまず「名詞＋なのだ」が二重のコピュラ構造であることから、「命題＋のだ」と「名詞＋なのだ」のいずれも「の」に先行する部分が述語をもつ節を形成しており「節＋のだ」という共通の構造をもつことを指摘する。その上で、「のだ」と「節」の機能を別々に分析すると、「のだ」の機能は「命題＋のだ」と「名詞＋なのだ」で共通しているが、「節」の機能が異なっていることが分かる。このことから「命題＋のだ」と「名詞＋なのだ」の機能上の違いは「節」の違いから生じていると結論付ける。

Wh 付加詞構文の特性

山寺由起

「何を」の付加詞としての用法は，Kurafuji（1996）以来，様々な研究者によって論じられてきた。高見（2010）は，動詞の種類によって適格性が決まるのではなく，一定の機能的制約があることを示している。山寺（2010）では，「何が」にも付加詞的用法があることを指摘した。本発表では，さらに「何も」や「何か」が付加詞として用いられる場合があることを示し，以上の 4 種類の Wh 付加詞を用いた文を Wh 付加詞構文として考察する。Wh 付加詞構文の特性として，まず，Wh 付加詞が必ず位相の左端に現れることを見る。また，当構文は，話し手と聞き手の立場の対立が起こっている場面で適切に用いられ，話し手の立場として対立命題が伝達されることを提

案する。これらの特性が，語用論的規則が適用される位置である位相の左端に[+contrastive]の要素が現れるとする López（2009）の主張と共鳴することを示唆する。

名詞化構文に現れる「が・の」交替について

赤楚治之、原口智子

日本語生成文法における「が・の」交替の研究は、ほとんどが名詞を修飾する連体節（prenominal sentential modifier）内で起きる現象を対象にしてきた。しかし次の(1)に示すように、ある種の名詞化構文（動詞由来名詞化構文）についても「が・の」交替に類似した現象が観察されうる。

(1) a. 学生 が/の 書きかけ の 論文　　b. 父 が/の 飲みさし の ビール

本発表では、まず、この構文（少なくとも、名詞化の基体となる動詞の目的語にあたる項が被修飾部（主要名詞）を占める場合）における「が」格は、(2)のような叙述名詞（predicate nominal）を含む表現に見られる「が」格と認可方法が異なることを確認する。

(2)　　小学生が主人公の物語

次に、名詞化構文における属格主語が、所有者解釈やアスペクト副詞との共起の観点から、連体句の内部に存在する可能性について論じる。さらに、この種の構文と、(3)のような対応する関係節の構文との比較を通して、この現象に対する理解を深めることになる。

(3)　　学生が書きかけた論文

「VN ダ」文の機能―「VN スル」文との比較を通して―

久保田一充

本発表では、日本語の「X ハ VN ダ」という形式(「VN ダ」文)を、「X ハ VN スル」という形式(「VN スル」文)との比較を手掛かりに分析し、「VN ダ」文の機能を明らかにする。具体的には、「VN ダ」文が、(i)〈意志表出〉として機能しないということ(cf. (1))、(ii)無意志動詞的 VN や非動作動詞的 VN では容認度が低いこと(cf. (2))、(iii)主語の意志では操作できないような事象を表現すること(cf. (3))を示し、そのことから、「VN ダ」文には「確定事象叙述」と名付けられるような機能があることを論じる。本発表では、「確定事象」を「発話時以後における成立が発話時以前に既に確定している事象、または、ある条件の下でその成立が確定するような事象」と定義した。

決めました。私、引退{*です/します}！
定期券を紛失{*だった/した}。
この試合に勝てなければ、俺達 3 年生は今年で引退{だ/*する}。

【D 会場】司会：西村義樹、堀田優子

日本語における Event Cancellation について

石井創、西前明
大羽良、石川潔

「燃やしたけれど、燃えなかった」のような日本語の event cancellation 文の容認性に対する以下の２つの要因の影響を、統制実験により検討した。すなわち、(1) 他動詞の telicity、(2) 動詞句の

あらわす事象の「目標達成の可能性」（アラム 2001）である。いずれも統制実験に基づかない主張である。本研究では、用いられる他動詞が atelic 解釈可能であれば event cancellation が容認されやすくなるという結果が得られた (1)。またアラムの主張通り、「目標達成の可能性」の低さと event cancellation の容認度の高さの間に相関が観察された (2)。さらにまた、その相関が (1) の telicity の違いに応じて異なることも観察された。以上の結果は、日本語の event cancellation の容認度に関して、(1) と (2) の間に何らかの関係があることを示唆する。

トートロジの解釈メカニズムにおける文脈の役割について

宮崎千明

本発表ではトートロジ「X は X だ/ X is X」の用法のうち「ネズミを捕らなくてもネコはネコだ (坂原 2002)」のような、新たなカテゴリ化を主張する用法に焦点を当て、トートロジの解釈メカニズムにおいて文脈がどのような役割を果たすのか、また、その役割を果たすには、文脈は具体的にどのような情報を含んでいる必要があるかを分析する。

結論として、文脈が果たす役割は、(i)カテゴリ化の変更前・変更後に対応する 2 種類のカテゴリ構成を想起させること、及び、(ii)X の指示対象となるカテゴリ（「すべての X は同質である」が成立するカテゴリ）を指定することであると論ずる。加えて、文脈が上記 2 つの機能を果たすには、(i)カテゴリ分割・統合の意図、(ii)X の典型的性質を表す言語表現・状況、(iii)条件節（必要条件、十分条件）という文脈情報が必要であると主張する。

ケド中断節構文による「主観性・主観化」及び「間主観性・間主観化」について
―文法化と構文理論の観点から―

蔡明杰

本発表は、文法化と構文理論（Construction Grammar）の観点に基づいて、ケド中断節は単なる主節の省略ではなく独自の発話機能を持ち、形式と意味の慣習化された構文であることを、「主観性・主観化」及び「間主観性・間主観化」を通して考察するものである。

考察した結果としては、ケド節ではまず、逆接の接続助詞としてのケドが非主観的用法いわゆる意味的に本来の用法から、文法化によって、話し手の信念や態度を表す主観的意味へと拡張する。更に、意味的に拡張する際に、聞き手に対する話し手の注意を表す間主観性が見られ、構文としてのケド中断節が生じたと考えられる。そしてこのような拡張は、まさに文法化の理論が予測するところであり、決してアドホックな変化ではないことが明らかとなる。

動作主目的語と対象主語の具現化現象について

于一楽

従来の項の具現化研究における定説として動作主は必ず主語に具現化されるという共通認識がある。この一般的認識に反し，本発表は動作主が目的語に，対象が主語に具現化される現象が中国語の結果複合動詞において可能であることを示す。たとえば，例文“张三追累了李四”（張三−追い疲れる−ASP-李四）には３通りの解釈が可能である。 (i)張三が李四を追って張三が疲れた。(ii)張三が李四を追って李四が疲れた。(iii)李四が張三を追って李四が疲れた。(iii)の解釈が当該の具現化現象である。当該現象はあまり議論されておらず，本発表は語彙意味論の立場から当該現象の成立条件並びにそのメカニズムを明らかにしたい。また，従来の一般的認識に反する現象を

明らかにする本研究は，記述的にも形式的にも言語の普遍性と個別性の解明に貢献できるという点において意義のあるものだと考えられる。

中国語 Dou と Scalar 解釈

毛利史生、鄭磊（ていらい）

中国語の dou の振る舞いは多様で、その多様な振る舞いに統一的な分析を与えたのが Xiang(2008)の maximality 演算子分析である。本発表でも、Xiang の主張を部分的に踏襲し、その本質的機能として「順序関係のある集合に作用し、その中で最も高位に位置する要素を抽出する」と主張する。しかし一方で、Xiang の主張には不備な点があることを指摘し、その修正案を提示していく。例えば、 dou が分配詞のように振る舞う場合、Xiang に従って、演算詞を主語名詞句の外延に作用すると仮定する限り、誤った解釈を導出することになる。本発表では、VP が主題述語 v(Voice)と merge した段階で dou が作用することを代案として提示する。また、スケール解釈を導出する lian..dou 構文では、lian と NP が merge した構造を仮定する。それにより、lian が NP に順序関係のある集合を作りだし、その順序関係を示す lian 句に dou が作用するというプロセスを提示する

中国語における証拠性モダリティー可能補語 -不了(-*bu liao*) についてー

福田翔

本研究は、中国語の可能補語形式の中で先行述語に静態形容詞、補語に“-了(-liao)”を有する形式「静態形容詞＋不了」について考察する。本形式は、従来「推測」の意味を表すとされており、近年では「認識的意味(epistemic meaning)」というモダリティ論に引き付ける形で捉え直されてきた。しかし実例調査に基づいて、その構造及び統語的特徴を明らかにした上で詳細な分析を行った結果、次のことが分かった。(i)本形式は述語用法、連体修飾節用法、副詞用法があり、前二者は数量表現の有無という統語的特徴によって否定のスコープが変わる。(ii)意味的観点より、数量表現が後続する場合は「様態性」に偏り、数量表現が後続しない場合は「推定性」に偏る。つまり当該形式の中核的意味は、従来指摘されてきた「認識的意味」ではなく、何らかの情報源を有する「証拠性(evidentiality)」の表現であると言える。

【E 会場】司会：三間英樹、那須川訓也

上海語窄用式変調の音響音声学的記述

髙橋康徳

漢語呉方言に属する上海語では、文中において単独で音韻語を形成する音節の声調に「窄用式変調」と呼ばれる現象が起こることが報告されている。Chen (2000)などは窄用式変調を音韻的な水平声調化および声調の中和現象として解釈しているが、石汝傑 (1995)は発話速度と関連した音声的な現象として解釈している。しかし、これらの研究は客観的なデータに基づいておらず、どちらが妥当な解釈であるかを判断することは困難であった。本研究では音響音声学的な手法を用いて窄用式変調を記述し、上記の 2 つの解釈のうちどちらが妥当な解釈であるかを考察する。計測の結果から、1. 窄用式変調は音韻的な水平声調化ではなく、2. 声調の中和も起きているとは言

えず、3. 発話速度と関連する現象であることを指摘する。これらの結果は、窄用式変調は音声的な現象であるという解釈を支持するものである。

日本語の半母音と母音の共起制限—調音及び知覚音声学的説明—

田中雄

本研究では、日本語の半母音/j/と/w/の後続母音との共起制限の差異について、調音及び知覚音声学に基づく説明を提案する。共起制限*ji や*wu は、対立/ji/-/i/、/wu/-/u/が知覚的弁別性の低さにより中和した結果であると想定し（Padgett 2001）、他の共起制限の有無と/j/と/w/に関する非対称性も、両者の調音・知覚特性の差異に由来すると主張する。/w/と/u/は、/j/と/i/に比べて通言語的に同時調音を受けやすく、特に舌頂音や前母音環境において舌が前寄りになることが知られている（Ohala & Lorentz 1977, Ladefoged 1999）。そこでこの同時調音が、/wi/と/i/、/we/と/e/の知覚的弁別性を低くする一方で、/ju/と/u/の弁別性を高め、対立の維持と中和に影響を与えるとの仮説をたてた。この仮説は日本語話者を対象とした発話実験の結果により支持され、/j/と/w/の分布の差異が、調音・知覚音声学の観点から証明された。

オノマトペの音象徴は普遍的かー日本語母語話者による韓国語オノマトペの判断ー

崔絢喆、黒沢晶子

韓国語のオノマトペを日本語母語話者が聞き音の大きさ・程度の強さを判断する実験を通して、異なる音韻体系間における音象徴感覚の違いを示す。

韓国語には、陽・陰母音の二項対立、及び子音に平音・濃音・激音の三項対立があり、音象徴と結びついている。日本語母語話者は、陽母音を広母音、陰母音を狭母音と聞き取り、擬声語については「広母音＝音が大きい」「狭母音＝音が小さい」の対で解釈しており、陰母音＞陽母音とする韓国語とは逆の結果となった。音のカテゴリー知覚が異なり、そのカテゴリーの母語における音象徴がたまたま正反対だった結果と言える。

一方、閉鎖子音は擬声語、擬態語とも結果に一貫性がみられなかった。濃音ー激音ペアは、①VOT を手がかりに区別し日本語の音素として認識、②帯気性を基準に自由異音として認識する二つの認識パターンがある。平音ー濃音ペアは、VOT・帯気性でなく濃音の基本周波数の高さ等が判断に関わる可能性がある。

ガナン語における低声調について

藤原敬介

ガナン語は、ビルマ・ザガイン管区・バマウッ地方でガナン人によってはなされるチベット・ビルマ語派・ルイ語群の言語である。

本発表では、筆者による一次資料にもとづいて、ガナン語音韻論のうち声調を中心に略述した。ガナン語の二音節語における声調のあらわれを観察すると、(A) 低声調が語頭にあらわれる頻度がひくい、(B) 低声調がもっとも頻繁にあらわれるのは高声調の直後である、という事実がわかった。さらに、機能語にあらわれる変調も考察した。その結果、概略としては、高声調の直後にあらわれる中声調が変調することにより低声調があらわれるということがわかった。そして、共時的観察からえられた結果を通時的に考察することにより、低声調は接頭辞の直後にあらわれる傾向にあることをあきらかとした。以上より、語頭の低声調はすでに消失した接頭辞の残滓であるとかんがえることができる。

エウェン語の音素配列

鍛治広真

本発表ではエウェン語（ツングース諸語）について、Robbek V. A. and Robbek M. E. (2005)による辞書の見出し語（キリル文字表記）を資料として用い、各音素の位置ごとの出現頻度を分析する。Robbek V. A. and Robbek M. E. (2005) の文字表記は大部分が先行研究の音韻体系に矛盾せず解釈できるのだが、対応する短母音がないと考えられる Ia、ie について長短の書き分けがされている点に問題が残るが、音素の分布を分析すると以下のような音素配列上の制約、傾向があることがわかる。

・長母音は第 1 音節に現れる例が大半であり、それ以外の場合は後ろから 2 番目の音節に現れる。
・円唇広母音の o, ɵ は第 1 音節に現れる。
・接近音子音（w, j, l, r）は語頭に現れない。（接近音から鼻音への変化が語頭で起きた可能性が風間(2003:153) に指摘されている。）

【F 会場】司会：彭国躍、時本真吾

日本語と朝鮮語の談話における「中途終了発話文」の出現とその機能

髙木丈也

本研究は, 日本語と朝鮮語の自然談話における「中途終了発話文」の出現状況と, 発話機能を対照し, 分析するものである. 談話の音声, 文字化資料を分析した結果, 形態論的類型と生起頻度の数は, 日本語の方が朝鮮語に比べ高く, 日本語では普遍的に現れるが, 朝鮮語では現れにくい類型が存在することが確認された. また, 発話機能を分析すると, 両言語において共によく現れるもの（情報提供, 意志(意見)表示など）と, 日本語において特徴的に現れるもの（談話表示, 行為要求, 関係作りなど）, 朝鮮語でも現れるが日本語においてより多く現れるもの（言い直し）があるということが確認された. 以上の分析から, 実現体としての中途終了発話文は, 規範文法における「完全文」に対する単なる省略ではなく, 特に日本語では, 談話において一つの独立した発話規則として存在するものであることが明らかになった.

韓国語漢字語の-hada 付加による動詞および形容詞化の動作性アスペクトによる予測

パクソンジュ、玉岡 賀津雄、李 在鎬

韓国語の漢字語は，-hada を付加することによって動詞/形容詞になる。日本語の漢字二字熟語の高使用頻度 2,000 語の場合，「終結」の語彙の動作性アスペクトを持つという特徴だけで-suru 付加による動詞化を 93.64%(802 語中 751 語)予測できた(Tamaoka, Matsuoka, Sakai & Makioka, 2005)。そこで本研究でも，韓国語の漢字二字熟語の高使用頻度 2,000 語の-hada 付加を「開始」「継続」「終結」「状態」の４つのアスペクトと使用頻度で動詞/形容詞を予測する二項ロジスティック回帰分析を行った。韓国語の漢字語 2,000 語のうち動詞として-hada が付加されるのは 843 語で，「終結」のアスペクトの有無のみで 81.49%(687 語)予測できた。また，形容詞として-hada が付加されるのは 86 語であるが，「状態」のアスペクトの有無だけで形容詞としての-hada の付加が 90.69%(78 語)予測できた。つまり，韓国語の漢字語においては，-hada 付加による動詞化は「±終結」，形容詞化は「±状態」の特性を持っていることが分かる。

事象関連電位に観る敬語規則：尊敬語と謙譲語

宮岡 弥生、時本 真吾

本研究では、日本語敬語処理が惹起する事象関連電位(ERP)を指標に、敬語処理の神経基盤を考察した。刺激文は、敬語の種類(尊敬語・謙譲語)と文法性(正文・非文)を要因として作成した。また、敬語種差異の検討に当たり、語順の効果が交絡する事を避けるため、2 通りの語順(基本語順・かき混ぜ語順)を用意した。実験では日本語母語話者 20 名に対して刺激文を文節毎に視覚提示し、二肢強制選択のボタン操作による文法性判断課題を課した。分析の結果、正文-非文の対比で、尊敬語非文の文末文節提示後約 400ms に、両側頭から後頭にかけて有意な陰性成分(N400)が観察された。意味処理を反映すると言われている N400 が観察されたことから、本研究で考察した敬語規則は、人間関係理解を含む意味的制約と考えられる。また、ERP の頭皮上分布と振幅は尊敬語と謙譲語間でかなり異なっており、敬語種によって処理内容が異なることが窺われる。

英語における主格・対格・属格処理の脳内メカニズム

横山悟、牧秀樹、橋本洋輔
當眞正裕、杉山朗子、川島隆太

人間言語は、複数のシステムから成り立っており、その一つに格システムがあると考えられている。その格システムに関する処理は、文法処理に関与する可能性が指摘されている左半球の下前頭回の関与があると予測される。本研究では英語を対象言語とし、英語話者の主格・対格・属格の処理中における脳活動を functional magnetic resonance imaging（fMRI）により撮像した。結果として主格・対格・属格の処理中には、どの格においても左半球の後部上側頭回、頭頂葉において強い活動が観察された。一方、左半球の下前頭回三角部において、主格と対格には差がなかったものの、属格処理においては主格・対格双方より下前頭回の脳活動の上昇が観察された。本結果は、動詞と密接な関係がある主格・対格と、名詞句内の名詞との関係のみを持つ属格との間に、脳内における処理の点で機能的な違いがあることを示した。

否定呼応違反に関する事象関連電位について―シカナイ構文の検討

備瀬優、坂本勉

日本語の助詞「シカ」は、対応づけられる述語が否定形であることを要求する。このような否定呼応の特性に対しては、これまで理論的な分析が試みられてきたが、生理的指標に基づいた研究は行われてこなかった。そこで本研究では、文理解時の事象関連電位(ERP)を測定することにより、シカナイ文における否定呼応違反の性質について検討した。実験では正文(親友にしか/非礼を/詫びない)と非文(*親友にしか/非礼を/詫びる)を文節ごとに視覚呈示し、第 3 文節(詫びない/詫びる)呈示時の EPR を比較した。その結果、第 3 文節呈示後 600 ミリ秒付近で、右側後頭部において、非文条件の波形が正文条件に比べて陰性に偏移していた。この ERP 成分は、その極性・潜時・頭皮上分布から、意味的逸脱の検出を反映するとされる N400 に相当するものと考えられる。このことから、シカナイ文の否定呼応処理は意味的な性質を有するものであると主張する。

副詞イッタイを伴う Wh 疑問文の処理と文脈の効果

小野　創、酒井　弘

「先生はいったいどの学生が落第したと思ったのか」のように副詞イッタイを伴う wh 疑問文では，wh 句と補文標識カの間の依存関係に加えて，副詞イッタイと補文標識カの間にも依存関係が構築されると言われている．本研究では，副詞イッタイが構築する依存関係の特性を実験的に探求した．依存関係が構築されるためには，補文標識カが副詞イッタイを c 統御するという統語的制約を満たす必要がある（Huang & Ochi, 2004）．しかし適格性評定課題（実験１）及び文完成課題（実験２）を用いた実験では，必ずしもこの制約を満たす構造が選好されるとは限らなかった．実験３では，主題と焦点が明示される文脈を加えた条件と文脈が無い条件で文完成課題を実施したところ，文脈がある条件でのみ制約を満たす文が選好された．この結果は，どのような情報が活性化されているかに応じて，文解析器が構築する依存関係の種類が異なることを示唆している．

【G 会場】司会：星泉、宋在穆

北琉球奄美湯湾方言における準体助詞 *sɨ* の形態統語的振る舞いについて

新永悠人、下地理則

本発表の目的は、北琉球奄美湯湾方言の準体助詞 *sɨ*「もの、人、こと」の形態統語的な振る舞いを記述することである。*sɨ* を含む例は以下のとおりである。

(1) *maga=nu=[sɨ]=nu*　　*ʔa-i.*
孫=属格=[もの]=主格　ある-非過去
「孫の[もの]がある。」

(2) *maga=nu*　*jum-ju-[sɨ]=nu*　　*ʔa-i.*
孫=主格　読む-未完了-[の]=主格　ある-非過去
「孫が読む[の]がある。」

上記の通り、準体助詞 *sɨ* は、その統語的環境によってその自立性（語、接語、接辞のいずれに近い形式であるか）が異なる。結論を述べれば、連体節の修飾を受ける場合は、(1) のように *sɨ* はその述語動詞の語尾として吸収される。それ以外の場合は、(2) のように接語として振る舞う。また、*sɨ* は格助詞を伴うことなどから名詞としての性質を残すが、単独で名詞句の主要部を埋めることができないことなどから、単に名詞として分類することには問題がある。このような「準体助詞」の特徴は、名詞句の主要部名詞の屈折語尾化という文法化現象の一例として非常に興味深い。

西夏語の遠称指示代名詞の使い分けについて

荒川慎太郎

西夏語の遠称指示代名詞は 3 種が指摘されているが，その使い分けが判然としなかった。文献中，登場頻度の高い順に，A, B, C とすると，A と B は同一音節で声調が異なる。B と C は同一音節で声調も等しい。全て異なる西夏文字で記される。

本考察では，指示代名詞の使用例が多い経典を資料とし，A～C がどのような環境で現れるかを検討した。

その結果，指示代名詞に後続する要素に，A：名詞，「～に随う」，「～と」など，B：「～の間」，「～の所」，「～の中」など，のような傾向があった。A はほぼ名詞を修飾し，格標識が後続する場合も，随伴・付帯を含意するものに限られる。一方 B は，ほぼ全て格標識（多くは場

所を示す）が後続していた。ゆえに本発表では，A, B の使い分けが，後続する要素の語彙的な違いによるものと結論付けた。

C は例数が少なく，後続する要素にも傾向が見られない。暫定的に前方照応的な用法などを指摘した。

スワヒリ語における「外の関係」の関係節

米田信子

スワヒリ語の関係節には主名詞に呼応する関係接辞をつけるが，関係接辞を動詞につけるもの（amba-less 関係節）と，関係詞 amba-を挿入し，そこに関係接辞をつけるもの（amba 関係節）の２種類の形式がある。amba-less 関係節には，①共起できる時制接辞の制限，②主名詞の直後に動詞を置くという語順の制限がある。先行研究ではこの制限の有無が２種類の関係節の違いであるとされてきた。しかしながら，これは主名詞と修飾節の間に格関係が成立するいわゆる「内の関係」の場合である。「外の関係」では，amba-less 関係節による関係節化は①②だけでなく，さらに制限される。一方 amba 関係節は，主名詞と修飾節の間に因果関係が成立しさえすれば「外の関係」であってもかなり自由に関係節化できる。本発表では，２つの関係節の「外の関係」における振る舞いを検討し，これまで指摘されてこなかった違いを明らかにする。

モンゴル語の「後置詞」の特徴

梅谷　博之

モンゴル語ハルハ方言には，先行研究で「後置詞」として分類される諸形式がある。本発表では，これら諸形式の特徴を，（１）「後置詞」が直前の名詞と一体となって一つのアクセント単位をなすかどうか，（２）「後置詞」とその直前の名詞との間に他の要素（例えば l「～だけ」，n’「彼の」）が入り得るかどうか等の観点から記述し，「後置詞」が有する特徴が一様ではないことを主張する。また通言語的に，「後置詞」は格接尾辞との区分が問題になる。モンゴル語を扱った先行研究の中にも，ある特定の「後置詞」を格接尾辞の一つとして認定するべきであると主張するものがいくつかある。こうした主張について，妥当性を検討する。

アイヌ語動詞の項同定制限―再帰接頭辞を中心に―

小林美紀

アイヌ語には二種類の使役接尾辞-re、-yar がある。-re が動詞のとる名詞項数を一つ増やすのに対し、-yar は被使役者を名詞項として要求せず項数を変化させない（不定使役）。一方、再帰接頭辞にも si-と yay-の二種類があり、-re により形成された使役動詞に si-が接頭すると主語（使役主）と同定された動作対象を示すのに対し、yay-は yay-korpa-re「～を自分に持たせる、～を持つ」のように、対象ではなく被使役者（korpa「～を持つ」の動作主）を示すことが観察されている(切替(1985))。このことは、si-tere-yar「自分を待ってもらう」のように-yar が接尾した動詞に si-が接頭する例はあるが、yay-が接頭する例は確認できないという現象を説明すると思われる。すなわち、-yar による不定使役動詞からは、被使役者を示す yay-による派生は行えないと考えられる。

南琉球八重山波照間方言の「形容詞」認定に関する問題

麻生玲子

本発表は、南琉球八重山波照間方言において形容詞を認定する際に生じる問題を扱い、波照間方言を記述する際に「形容詞」という語類の必要性を検証する。

これまでの先行研究では以下の例文(1)の語を形容詞、(2)の語を動詞と分類している。一方、筆者は波照間方言の語類に形容詞を認定せず、機能的な幅や屈折カテゴリーが同じであるという理由からどちらも動詞に分類した。

(1) taka-ha-ø-n.
高い-ha-NPST-RLS
高い。
(2) ng-ø-n.
行く-NPST-RLS
行く。

しかし最近の調査で(1)のように一般的に形容詞と呼ばれている語の語根が、副詞的あるいは名詞的に振る舞う例が見つかった。これらの例を考察した結果、波照間方言において形容詞という語類を認定する必要性は極めて少なく、むしろ①語根類と語類の区別、②語類と類型論的な概念の区別が必要であるという結論に至った。

口頭発表（2010 年 11 月 28 日）

【A 会場】司会：島田雅晴

ミニマリスト・プログラムに基づく日英語の副詞の分析

水野江依子

副詞研究における論点の一つに、その比較的自由な分布を統語的にどのように統一的に説明できるかというものがあり、これまで様々な提案がなされてきた。1990 年代後半からは特に、指定辞分析(Alexiadou 1997, Cinque 1999, Haumann 2007)が副詞の認可システムとして主流となっているように思われる。しかしながら一方で、この分析には様々な問題があるということも議論されてきた(Ernst 2002, Costa 2004)。本発表の主な目的は、指定辞分析に代わる代案として Mizuno (2010)が提案し、英語の文副詞(probably 等)について検証したフェイズに基づく副詞の認可メカニズムを用いて、日本語の文副詞（多分、おそらく等）を分析することである。さらに、副詞の認可子として提案される機能範疇 Mod(al)が CP 領域内に生起することを示し、近年議論をされている CP 領域とモーダル句の関連性について(cf. Rizzi 1997; 2004, 井上 2009) 副詞の認可の観点から論じる。

独立再帰形の特性と認可条件

永次健人

下の省略応答に見られるような独立再帰形は、一見すると、省略現象の一つとして、発音されない文構造を持っていると考えられる。

A: Who did the soldiers$_i$ believe were intelligent?
B: Themselves$_i$.

しかし、先行研究でも指摘されているように、独立再帰形は、文中の再帰形とは違い、束縛条件 A を無視するので、文からの削除では生成できない。英語の独立再帰形については、これまでほとんど論じられてこなかったが、本発表では、独立再帰形は西アフリカの言語などに見られる Logophoric Pronoun と同様の性質を持つと主張する。Logophoric Pronoun は、それを含む命題の話者、または、思考主を指示するとされる。また、英語では、文中でも logophoric な性質を持つ再帰形が見られることがあるが、これらと独立再帰形にどのような違いがあるのかも論じる。

拡大投射原理の二重性

大澤聡子

主語の存在を義務付ける原理、すなわち拡大投射原理（ＥＰＰ）（Chomsky（１９８１、１９８２））は時制要素（T）の素性に起因すると考えられている。つまり形態的要素の認可要求が関与すると言える。一方 É. Kiss（２００２）はハンガリー語を基に、ＥＰＰには形態的要求だけでなく、叙述関係の要求が必要であり、これら二つの要求が潜在的に含まれると主張する。この主張は、英語においても時制節の主語位置に二重性が含まれる可能性を示唆する。しかし、時制節では二つの要求が同時に生じている可能性があり、それぞれを分離して独立的に検証する事は難しい。

本発表では、英語の小節派生主語で二つの要求が独立的に観察できることを論じ、時制節Ｓｐｅｃ ＴＰには二重性が含まれると主張する。さらに、二つの要求はそれぞれ独立した要求であり、「EPP の二重性」は時制節 Spce TP で限定的に見られる現象であると主張する。

【B 会場】司会：本間伸輔

古英語における限定詞のパラダイム―最適性理論による分析―

中村渉

本発表の目的は，最適性理論を前提として，古英語の限定詞のパラダイムを，統語的素性複合を形態的素性複合へ写像する制約ランキング及び形態的素性複合を音韻形式として実現する語彙項目における文法素性の不完全指定により記述することである。

名詞類のパラダイムに関する従来の研究の多くは，格・数・ジェンダーの素性分解に依存しているが，格の素性分解は言語によって異なっており，パラダイムの変異を導く類型論的な基礎とはなりえない。本発表は，古英語の限定詞のパラダイムを，①類型論的妥当性を備えた有標性階層（格階層・数階層・ジェンダー階層）から導かれる有標性制約，局所的制約結合や有標性階層の調和的制約配列を通じて導かれる複合的有標性制約，忠実性制約（MAX 制約・IDENT 制約）の競合，②素性複合を音韻的に実現する語彙項目における格・数・ジェンダー素性の不完全指定から，導くことを提案する。

Wh 構文の解釈と韻律構造–佐賀方言と東京方言の対照より–

西垣内泰介、日高俊夫

(1) の Wh 疑問文は、東京方言では多義性があり、yes-no 疑問文と Wh 疑問文の解釈が可能である。

(1) ナオヤはマリが誰に会ったか知りたがっているの？

他方、無アクセント方言のひとつである佐賀方言では(1)に相当する文は yes-no 疑問文の解釈のみが可能である。

本発表では、(1) の東京方言における多義性を焦点イントネーション(FI) (Wh 要素が韻律上のプロミネンスを持ち、以後の音調が低く抑えられる)と関連づけて考える。佐賀方言では(1)に相当する文は FI の韻律特徴を示さない。

我々はこの違いを(2)の含意関係の有無によって捉える。

(2) Wh 要素の焦点素性 [+F] の解釈が [+WH] 解釈の必要条件である。

東京方言では(2)によって [+F] の解釈がなければ [+WH] 解釈がない。他方、佐賀方言はそのような含意関係が関与しない。この仮定に関連して、両方言における「Wh の島」制約の強さなど統語的現象を考察する。

再帰代名詞の長距離束縛の阻害効果に関する一考察

原田なをみ

本発表では従来十分な考察が得られていなかった日本語の"自分"と長距離先行詞間の阻害効果の条件を検証し、phi 素性の理論に対して具体的な提案を行う。

中国語の長距離再帰代名詞 ziji は一人称または二人称の主語を持つ従属節内にある時、三人称の主節の主語を先行詞として解釈できない（Huang and Tang 1991）。一方日本語では、中国語のような一・二人称の主語による長距離再帰代名詞と主節の三人称の主語との依存関係の阻害効果は明確な形では見られない。日本語では「主節と従属節の主語の人称が一人称または二人称で両者の数が異なる場合に、主節の主語と従属節内の長距離再帰代名詞との依存関係が阻害される」というデータを提示する。このデータは Bobalijk (2008)で示されている phi 素性の記述の可能性のうち、[speaker][hearer]という素性は単価であるという可能性を支持することを論じる。

【C 会場】司会：杉浦滋子

複合動詞「引き～」の意味の不透明性に関する一考察

史春花

本研究では、「難破船を引き上げる」のように、V1 と V2 の意味関係がはっきりしており、複合動詞の意味を「V1＋V2」の足し算で理解できるものを意味が透明なものとし、それ以外を不透明なものとする。意味の不透明さは 4 つの要因による：(1)V1 の「引く」の意味の漂白化、 (2)多義的 V1 の意味の不確定性、(3)複合動詞全体の意味派生、(4)複合動詞全体の形態的派生。

それぞれの要因を検討する上で、各要因に応じて複合動詞の意味を理解する方案を提案する。(1)は主に「引っ～」型複合動詞に見られる現象で、V1 の意味を促音便が持つ意味特徴から考える。(2)は V2 だけで複合動詞の意味を表せる場合が多く、V1 に「引く」の意味が残っているかどうか等を V2 と複合動詞の意味を比較した上で考察する。(3) については、複合動詞全体の物理的基本義に基づいて抽象的意味が全体的に派生したと提案する。(4) は「主語一致の原則」に違反した項目で、複合動詞の派生元から説明する。

明示的な特徴に基づく多義の分析―北海道方言を例に―

山口和彦、円山拓子

本発表の目的は、北海道方言の助動詞ラサルを例として、多義の分析を明示的な特徴に基づいて精密化し、それを意味ネットワークとして描くことにより、用法間の関係を視覚的にも明瞭な形で提示することである。本発表では、５項目の弁別的な特徴（1. 動詞の意味構造、2. 動作主の事態への関与度、3. 動作主の表示可能性、4. 共起する副詞、5. 現実の事態と予期される事態の対比）に基づいて用法間の関係を図式化する。多義を意味ネットワークで表すことには、①用法間の相互関係が明確になる、②多義の全体像が把握できる、③用法間の類似性・近似性が図表上の位相関係で表わされる、④多義の曖昧性が生み出す中間的な例も排除せず説明できるという４つの利点がある。さらに、ラサルは複数の文法範疇を横断する形で意味のネットワークが形成されるため、大局的には文法範疇間のインタフェースを考える上で示唆的であると思われる。

韓国語と日本語東北方言の〈推量〉の表現について

高田祥司

韓国語と日本語東北方言（旧南部藩領）では，「Pi-ka [1]o-keyss-ta/[2]o-l kes-i-ta」「雨が [1]降ルベ／[2]降ルゴッタ［だろう］」のような二種類の推量表現が使用され，[2]は共に「コトダ」に相当する。韓国語では，[1],[2]が事態を発話時の状況（上例では曇天等）と関係付けるか否か，東北方言では，判断が形成過程か否かで対立する。本発表では，一見異なる両者がどちらも［±現在性］の対立で，それぞれ状況／判断の現在性に注目したものと考える。以上の基本的な共通性から，両言語の[1],[2]は，(a)「今・ここ」との近接・隔絶，(b)聞き手との根拠の共有・非共有，(c)事情説明の用法（[2]，cf. ノダ）のような類似点を持つ。

また，両言語は過去表現にも二形式が存在し，それらは，(a) 現在との関係付けにおいて対立する，(b) 韓国語の対立は事態面に，東北方言の対立は，［＋現在性］の形式が現在の状態の意味を希薄にした結果，ムード面に注目している，という点で推量表現と類似する。

【D 会場】司会：小川芳樹

差の解釈と英語の度量句の分布について

田中英理

本稿は，英語の二種類の度量句(measure phrases; MPs)，つまり，裸 MP と by-MP の変化を表す動詞述語における分布を観察し，差の解釈が可能かどうかとこれらの MP の分布が相関していることを指摘する。変化動詞は，状態変化と位置変化に分類できるが，状態変化動詞のみが差の解釈を持ち，位置変化動詞は差の解釈を持たない。前者は二種類の MP を許容するが，後者は裸 MP のみを許容する（(1)）。

本稿では，これらの容認性の違いを，差の解釈がなされる比較級形容詞で両方の MP が許され，差の解釈のない絶対解釈の形容詞の場合に by-MP が許されないことと並行して分析する（(2)）。つまり，Kennedy and Levin(2009)で提案されたスケールのゼロからの計測を行う測量関数と差をとる測量関数があり，位置変化動詞が前者のみを意味の中に含むと分析することで，二種類の MP の分布を記述することができることを主張する。

(1) a. The temperature dropped (by) five degrees.　b. Galileo dropped the ball (*by) 55 meters.
(2) a. John is taller than Bill by five centimeters. / John is five centimeters taller than Bill.

b. *John is tall by 180 cm. /John is 180 cm tall.

XP away from V-ing という構文について

松山哲也

英語には、(1) the Red Sox were just one out away from winning the World Series.のように動名詞を従えた away from の用法がある。(1)は、「レッドソックスはワールドシリーズ制覇からあとアウト１つだけ離れていた」のように日本語では直訳がきかず、 動名詞をその行為の達成される到達点と捉えて意味がはっきりする(「レッドソックスはワールドシリーズ制覇までアウトひとつだけだった」)。この場合、動名詞は到達点を表し、度量句(just one out)はそこに至るまでの「距離」を表す。「起点」を表す away from の目的語は、なぜ(1)では到達点として解釈させるのか。本発表では、(1)を関連する構文と比較しながらその意味的特徴を明らかにし、この構文が到達点を表すのは、英語の「結果重視」の発想を強く反映したためであると論じる。

ワークショップ１（2010 年 11 月 28 日）

【E 会場】

語順と機能範疇

企画者、司会：遠藤喜雄
発表者：遠藤喜雄、井上和子、森山卓郎、Cedric Boeckx, Guglielmo Cinque

本ワークショップでは、語順と機能範疇を扱う。近年ヨーロッパを中心に開発中のカートグラフィープロジェクトでは、人間の持つ言語の多様性、普遍性そして豊かな表現力を、ミニマリズムが想定する最小の道具立ての演算装置、音と意味のインターフェイスの要請、経済性の原理そして多様な機能範疇の相互作用から生じると捉える。本ワークショップでは、機能範疇の持つ特性として、(1)言語間の差異を生み出すパラメターの情報、(2)意味、(3)音声と意味に関する指令の３点を以下の構成で考察する。まず、全体の概要とアスペクトに関わる機能範疇と語順の関係を概観し（遠藤）、日本語に見る自由語順の性質を日本語とハンガリー語から考察しながら（井上）、機能範疇が持つイントネーションと意味の情報を日本語学研究の論点から論じ（森山）、生物言語学(biolinguistics)の観点から語順と機能範疇をミニマリズムとカートグラフィーの視点から論じ（Boeckx）、Greenberg(1963)に始まる語順の普遍的な性質を俯瞰しながら、機能範疇の内部構造や性質を考察する(Cinque)。

カートグラフィープロジェクトの概要と論点（アスペクトと複合語）

遠藤喜雄

本発表では、カートグラフィープロジェクトの概要と論点を簡単に紹介した後で、特にアスペクトの普遍的な階層を論じる。例えば、動詞にアスペクトに関わる動詞が結合されることで生じる次のような事例の語順が、普遍的なアスペクト階層から自動的に導き出されることを見る。（食べーそこねーがち（未完―習慣）食べーきりーそこねる（完全完了―未完）、食べーそこねーまくりーがち（未完―繰り返し―習慣）、通いーつけー終える（継続―完了）＊食べーそこねーかける、＊食べーがちーそこねる、＊食べー続けーかける

使いー切りー終えーがち（文脈：シャンプーを最後の一滴まで使うことを全てのボトルに関してする）

自由語順　(Free Word Order)

井上和子

本発表では、日本語は構成的構造を持っているのかどうか、持っているとすると、深層構造、表層構造のいずれの段階で構成的であるのかという問題をまず取り上げる。さらに、構成的構造＝固定語順という関係が常に成り立つのかという問いにたいして、構成的構造を持ちながら自由語順を持つ言語が存在する可能性について考察する。ハンガリー語と日本語からの資料を基にこの可能性が如何に実現しているかについて論じる。

本発表は、次のように構成されている。まず、ハンガリー語を資料に自由語順言語の特徴を記述する。次に、固定語順をも併せ持つとされるハンガリー語の資料を検討し、最後に、日本語が構成的言語であるかどうかを問い、これが構成素の語順に関する一般的類型に属するかどうかを考察する。

文の情報伝達的意味とイントネーション

森山卓郎

本発表では、以下に見る文の伝達的意味とイントネーションの関係を論じる。
１　代行上昇：疑問文の「か」の存在の代わりに上昇させる。
(1)これは君の本です。
２　代行上昇の無効化：「う・だろう」の特殊性
(2)これは君の本でしょう　　↑／↓
３　上昇の原型的意味：終助詞の存在と代行上昇の無効化
上昇の原型的意味としての「聞き手伺い」と終助詞における意味
(3)昨日田中君に会ったよ。　↑／↓
４　イントネーション制約との関わり
(4)この本、君の本ですね。
イントネーション制約（森山 1989､2001）：平叙文と疑問文という本来的な確定性に対して、文末形式によって文全体としての聞き手への情報依存状況が違ってくる場合、その情報依存状況に適合したイントネーションに限られる。
・「だろうか」のような疑問文、「そうか」といった情報受容疑問文の「か」が上昇しない。
・「ね」が平叙文ではふつう高くつく（ただし、「〜かね」のような疑問文中では下がってもよい）

The perils of Cartography

Cedric Boeckx

In this talk I examine the relationship between two research programs that emerged in the context of Government-and-Binding/Principles-and-Parameters:minimalism and cartography. Though often combined in research projects, I will highlight the fact that there is a certain tension between the two, a tension that recalls the oft-mentioned tension between descriptive and explanatory adequacy, and that is most obvious in the context of the biolinguistic enterprise. I will try to address this theme by focusing on the selection

problem recently discussed by Ur Shlonsky. This will lead me to raise questions concerning the syntax-semantic interface.

Word Order Typology. A Change of Perspective.

Guglielmo Cinque

In much work stemming from Greenberg (1963), the order of V(erb) and O(bject) has been claimed to correlate with the relative order of many other pairs of elements (P and DP, Aux and V, etc.).Despite the feeling that we are confronting some *great underlying ground-plan*, to borrow one of Sapir's (1949[2],144) expressions, and despite the numerous attempts to uncover the principle(s) governing it, the concomitant demand of empirical accuracy with respect to actual languages has reduced virtually all of the (bidirectional and unidirectional) correlations proposed in the typological literature to the state of mere tendencies. With the increase of the number of languages studied, the neat mirror-image picture of OV and VO languages has proved full of exceptions and disharmonies. We may wonder whether something would change if we reversed this perspective; not by asking what the *predominant* correlates of OV and VO orders in actual languages are, but by asking what precisely the harmonic word order types are that we can theoretically reconstruct, and to what extent each language (or subset of languages) departs from them. This change of perspective entails viewing the "harmonic" (head-initial and head-final) orders as abstract and exceptionless, and independent of actual languages (though no less real). Which implies that:

If we take this general perspective, then the first task consists in determining precisely what the abstract harmonic orders are. These orders should be seen as ideal mirror-image orders drawn (possibly further regularized) from the most polarized language types (rigid SOV and rigid VOS languages, which are the best approximations to the ideal orders, but mostly still not quite coincident with the ideal orders: even Japanese, one of the most "rigid" SOV languages, displays some non "head-final" characteristics). The lists of correlations pairs familiar from typology are important but actually not sufficient to reconstruct the "ideal" harmonic orders, and, as we shall see, may in fact mislead one into attributing to the same type word order types that should be kept distinct. What is needed is the entire cartography of the internal functional structure of the clause and of the other major phrases. I will eventually suggest that these harmonic orders should not be seen as primitives, but rather as derived from a universal base structure conforming with antisymmetry (and possibly reflecting the relative scope of the elements involved) via two distinct movement options, with actual languages departing to varying degrees from the "ideal" derivations.

ワークショップ 2

【F 会場】

Segmental variation in Japanese

Organizer: Tetsuo Nishihara
Chairs: Tetsuo Nishihara and Jeroen van de Weijer
Commentators: Manami Hirayama, Satoshi Ohta, Kan Sasaki, Tetsuo Nishihara and Jeroen van de Weijer

The purpose of this workshop is to investigate the issue of variation, especially in the segmental domain, in Japanese. Variation occurs in all kinds of areas: dialectal, stylistic variation, lexical strata, so-called "free" variation and in the form of "exceptions". Is variation is encoded in the

grammar or is the result of the operation of grammatical rules? Do different dialects have the same underlying representations but different rules? Do two speakers have the same underlying representations but different grammars if they show variation? What, within one speaker, about different speech styles? What are possible patterns of variation and what are impossible ones? Are these patterns congruent with cross-linguistic differences?

Vowel devoicing in Japanese and postlexical alterability of syllable structure

Manami Hirayama

In Tokyo Japanese, apparent consonant clusters are found in speech, as in [ksa] “grass” and [skii] “ski”. Such words can be optionally, though unnaturally, pronounced with a vowel between the consonants. It can be said that these words have an underlying vowel, which undergoes a (postlexical) deletion process. Whether this process really deletes the vowel or not has been a long debate in the Japanese literature. In this paper, I investigate the status of the vowel by looking at the consequences of the vowel deletion analysis for prosody, specifically the syllable: if the vowel is deleted in this process, the syllable affiliated with the vowel might be deleted. I consider the accent realization of certain minimal pairs.

On the relationship rendaku and accent

Satoshi Ohta

This study examines how Rendaku (sequential voicing) is affected by accent placement in compounds. It is well known that Rendaku is blocked when a compound has so-called coordinate structure: e.g. yama-kawa ‘mountain and river’. In this paper, focusing especially on 4-mora compounds adopted from proper names, I will statistically and experimentally demonstrate that accentuation on the last syllable of the first element of them involves the pitch-falling there, and thus it makes the cohesiveness between two elements weak. Moreover, I will theoretically consider the phenomena from the viewpoint of the Right-hand Head Rule. Assigning an accent on the left element of compounds is not canonical in Japanese, so such accentuation interrupts the cohesion of elements in compounds.

The morphology-prosody interaction for the syllable deletion in the Hokkaido dialect of Japanese

Kan Sasaki

This talk provides a constraint-based account of the syllable deletion process observed in spontaneous predicate formation in the Hokkaido dialect of Japanese and examines the conditioning factors for the variation among acceptable forms among different predicates. In this dialect, when the spontaneous predicate formation yields the [sasa] sequence, the first syllable [sa] is deleted. The syllable deletion is blocked when the verb root is too short. The variation is captured by the morphological segmentation of Sino-Japanese + light verb sequences. The proposed constraint ranking is useful to capture the other [sasa] related phenomenon, namely, causative allomorph selection in the causative-passive formation.

口頭発表（2010 年 11 月 28 日）

【G 会場】司会：小林正人

Case Markers and Adpositions in Japanese-Chinese Code Switching

MENG Hairong, MIYAMOTO Tadao

The present case study of a Japanese-Chinese bilingual infant investigates the grammatical constraints on code switching in light of the Matrix Language Frame model augmented by the 4-Morpheme model (Myers-Scotton, 1993, 2002). Case markers and adpositions involved in code switching utterances are examined within the database of 24 hours transcriptions of audio-recording. It is found that:

1) Japanese case markers *-ga* and *-o* are 'outsider morphemes', which determine the matrix language;
2) Japanese *-to* ('*and*'), *as well as -no* and its Chinese counterpart *-de* can be regarded as 'bridge morphemes', which are not constraint in the occurrence of code switching;
3) However, it is difficult to categorize other adpositions under the 4-Morpheme model, since in some examples the matrix language is not obviously identified.

アミ語における書き言葉の影響

今西一太

アミ語（台湾）は書き言葉を最近獲得した言語である。話者の中には、書き言葉に堪能なものとそうでない者がいる。書き言葉に堪能な話者の話し言葉には以下の特徴がある。(1) 話の流れの中での前後関係の明示（接続詞的な単語の多用）、(2)「節」「文」の設定し易さ。一方、書き言葉に堪能でない話者の話し言葉は以下の特徴を持つ。[1] 音声的アイコニックな表現の多用、[2] 割込や不完全な文の多さ、[3] 間違え、言い換えの多さ。以上の差は書き言葉の影響によって生じたものであると考えられる。

また、外国語（日本語・北京語）の書き言葉に堪能な話者でも、アミ語の書き言葉に堪能でないものは、書き言葉的話し言葉を用いない。つまり、外国語の書き言葉能力は話し言葉にほとんど影響を与えない。

アラビア語チュニス方言のモダリティを表す小辞

熊切拓

本発表において取り上げるのはアラビア語チュニス方言の Raa-, haa-, Maa-の３つの小辞である（大文字は咽頭化音を示す）。

本発表ではこれらの小辞が用いられた例をそれぞれ挙げた上で、以下のような結論を提示する。

(i) これらの小辞は、話者の態度を表すというモダリティに関わる共通点を持つ。

(ii) これらの小辞は、不変化辞である点、常に人称辞とともに現れ、それに接尾される人称辞の系列も同じである点、文中の主要部として現れる点、否定辞が付加されえない点において統語的に共通の特徴を持つ。

よって、これらの小辞は意味的な観点からも、統語的な観点からも、同一のカテゴリーをなすと考えられる。通時的にみれば、この３小辞はそれぞれ異なる品詞に分類されうる。Raa-は動詞、

haa-は指示詞、Maa-は（おそらく）否定辞であるが、この方言においては、これらの出自の異なる要素が、ひとつのカテゴリーに集約されるという発展が生じたと見ることができる。

ポスター発表（2010 年 11 月 28 日）

日本語並立助詞「や」の語用論的解釈と翻訳可能性

川口裕子

並立助詞「や」は、一般的に名詞があるセットの一部として列挙されていることを示唆し、全要素が挙げられていることを示す「と」とは区別される(cf.寺村 1991)。しかし実際には、全集合取り上げの例(cf.朴 2003)や英語の‘and’と‘or’の両方にまたがる例(cf.国廣 1973)などその解釈は多岐にわたる。
本研究では、「や」を含む日本語文がどのように解釈され、翻訳されているかを考察した。「英辞郎 on the WEB」上のデータを分析したところ、その翻訳例は５つに分類された。

(a) A and B and so on
(b) A, B or others
(c) A and B
(d) A or B
(e) A and/or B

「や」はその多義性ゆえにラング単位で翻訳しようとすると翻訳不可能論(cf.Mounin 1965)に陥るが、原則としてパロールを対象に語用論的に解釈することにより、文脈に合わせた適切な翻訳が可能であることを示した。

満洲語の黒を表す 2 つの色彩語

早田清冷

満洲語の「黒を表す色彩語」として，sahaliyan と yacin の２つが知られている。満洲語の色彩語に関して，特定の一言語作品の共時態の研究を行ったものは『満文金瓶梅』(『金瓶梅』の満洲語訳，1708 年序)を資料にした研究一つしか管見に入らない。本発表では『満文金瓶梅』より半世紀以上昔の資料『満文三國志』(『三國志演義』の満洲語訳，1650 年序)の共時態の研究をも行い，二語の意味的異同の本質と両共時態間の異同をも考察する。17 世紀中葉の『満文三國志』で sahaliyan「黒(暗い色)」と yacin「暗い染料の色」という使い分けをされていた二語が，18 世紀初頭の『満文金瓶梅』の満洲語においては，yacin は染料以外にも使用範囲を広げて無標の黒に変化しつつあり，sahaliyan は狭く限られた一部の表現へと使用範囲を狭めつつあったと窺えることを指摘する。